

Colloquia 40 周年記念号に寄せて

井上 逸兵

同人誌 *Colloquia* が創刊された 1980 年は、英語学、言語学を学史的にながめても、英文科・英米文学専攻の歩みを見ても、転換点のひとつと言える。小生の年齢は 28 歳であると学生を洗脳してかれこれ 10 年以上になるが、思えば、50 周年の時には詐称がばれて退職している可能性が高い。したがって、ここで今後もおそらく誰も語らないであろう専攻史の一側面を書き残しておくべきだという天の声がした、気がする。

塾文学部英米文学専攻における英語学、言語学は巨人厨川文夫先生らの英文科創生期から、英米文学専攻と大看板を変えながらその一角を担って今日に至る。1980 年は、学部科目「現代英語学」開講の祖となった、私の前任者でもあり、恩師でもある唐須教光先生が義塾に着任された年でもある。唐須先生は、意味論、言語人類学を中心に、それを基盤として言語学全般を講じられていた。「現代英語学」は linguistics に対応する術語と考えられる。linguistics の世界では、1980 年は、理論的パラダイムが「自律系」から「開放系」へと展開する基点となった Lakoff and Johnson の *Metaphors We Live By* の出版年でもある。

本英米文学専攻では、philology を「英語学」、linguistics は「言語学」と呼び分ける、あまり一般的ではない風習がある。この慣行は、philology が本道で、linguistics は新参者という図式を伝統としてもつ本専攻の歴史の産物である。現在の研究者人口比では、学会などの様子を見ると、linguistics の方が多数派だが(むろんそれは学問の価値とは無関係)、世の流れに動じない気風は、ウェーランド講述に象徴される義塾の学風なのかもしれない(皮肉でもイヤミでもなく、そういうとこほんとに好き)。松田隆美先生のお話では、英語史を必修科目にする専攻を擁する大学は世界に 5 つしかないそうで(ほかにイギリス 2 つ、ドイツ 1 つ、アメリカ 1 つ)、このレアさは、世界遺産としての登録を目指すべき我らの誇りである。

小生が英米に学生として来た頃(学士入学だった)、先生方や大学院生らのことばの端々から、あら、linguistics ってここでは蔑称なのね、と感じたものだった。幸い、当時すでに世間では linguistics が多数派を占める勢力図だったので、「英語学」と呼んでももらえない寂寥感がどこことなく心地よかった。小生が地方の大学に勤務している頃、在学中は遠い存在だった安東伸介先生にその地で引き合わせてもらい、何度か盃を交わす機会にあずかった。その席で、よし、君の linguistics は信じてやる、というお言葉をいただいたのはよい思い出である。

安東先生が「信じなかった」linguistics が、隆盛を誇っていた Chomsky 的な統語論を指すのか、はたまた当時同僚であられた唐須先生のものであったかは定かではない。いずれにせよ、唐須先生の伝説的に知られる愉快犯的所業(笑)は上のような文脈でとらえられるべきで、小生は小心者なのでアプローチは異なるが、当時の唐須先生の「犯行動機」(笑)は拝察するにあまりある。その意味で、唐須先生は専攻の中で絶妙の距離感をもってポジショニングをされてきたと思う。

そしてそれを慶應英米の linguistics は受け継いできた。

ところで、コロキア同人の linguist は誰もがわかっていることだが、本専攻の修士、博士課程入試の英文和訳の問題は、言語学を中心に勉強してきたものにとってはなかなかの難物である。文学的な言説にふれておかねば苦戦することうけあいである。しかし、これに傾ける労苦は linguist として生きていくのにも大きな資産となり、linguistics だけやっている他の学徒たちと差別化できるスキルにつながる。コロキア同人は英語学、言語学に限っても、多くの教員、研究者を輩出してきた。そしてその人材は、本人たちが意識しているか否かに関わらず、このような独自の背景をもち、独自のバランス能力をもつ人材としてこの世界で存在感を示してきた。これから 10 年は世の中も言語学も大きな変革期を迎えるが、そのような大波に乗るバランスをコロキア同人は備えているはずだ。

(慶應義塾大学文学部教授)